

知哉は、妹の予想外の行動に疑問の声をあげるのがやっとである。

ひなたは、ファスナーを開けてブリーフを露出させると、前開きからペニスを出した。仮性包茎の一物は、包皮から亀頭の先をちょこんとのぞかせ、まるで舐めて欲しいと言わんばかりに少女の前に突きでる。

「うわあ。お兄ちゃんのオチン×ン、こんなにおっきくなってる」

「……………」

妹の感想に、知哉は恥ずかしさのあまり言葉もない。

だが、ひなたの行為はそれだけではすまなかった。

「お兄ちゃん、お口でしてあげるね」

と言うなり、少女は可憐な手で竿を優しく包みこんだ。

男の手とは違う、柔らかな感触。ただ握られただけだというのに、知哉のペニスは硬さをいちだんと増してしまふ。

「まだ大きくなるんだ。すごい……」

感想をもらしながら、ひなたは亀頭にかかる皮を剥いてエラまで完全に露出させる。そして、鈴口に顔を近づけると、ややためらいがちにしながら兄のモノを口のなかに含んだ。

自分の手でしかつかんだことのなかった一物が、ふんわりとした温かさに満ちた少女の口内に呑みこまれていく。

「ううっ……ひ、ひな……」

あまりの心地よさに、知哉の体が自然に震えた。

喉の奥に先端が当たる感触があつて、ようやく妹の動きがとまった。その小さな口のどこにと思うくらい、勃起したペニスがしっかり含まれている。

ひなたは、少し考えこむような仕草を見せてから、顔を前後に動かしはじめた。

「んん……んぐ……んぐ……んちゅ……んん……」

小さく声をもらしながら、唇でなにかを確認するようにゆつくりとペニスをしごく。温かい口に一物全体が包まれ、ひなたが顔を動かすたびにざらつきとぬめりの入り交じった舌の感触が裏筋を微妙に刺激する。

竿に歯が当たらないように、ちゃんと注意しているようだったが、それでもときおり当たってかすかな痛みが生じた。しかし、そんなことさえも今の知哉には快感に思える。

「う……はあ……くううっ……はあ、はあ……」

妹が顔を動かすたびに全身に痺れるような快感が走り抜け、知哉の口からは喘ぎ声

が自然にこぼれていた。

激しくしごくオナニーしか知らない少年にとって、これほど柔らかく優しい刺激は初めての体験だった。

頭の芯が痺れ、妹の行為をやめさせようという気持ちも、あまりの心地よさの前にどこかへ吹き飛んでいる。

知哉の分身は、もう手で押さえていないと下腹にくつつきそうなくらい大きくなっていた。

ひなたはペニスを口から出すと、早くも溢れたカウパー腺液を舐め取るように、舌先で縦割れの唇をチロチロと舐めまわした。

強烈な快感が襲いかかり、知哉は思わず「はうっ！」と甲高い声を出してしまう。もしも立っていたら腰が砕けて座りこんでいただろう、と思うくらいの刺激である。

「あはっ……お兄ちゃん、気持ちよさそう」

少女は満足そうに微笑むと、今度は亀頭のもっとも太い部分にネットリと舌を這わせる。

「ひ、ひなた！　こんなこと、いったいどこで？……」

快感に喘ぎながらも、知哉は疑問の声を発していた。



すると、妹はいったん口を離すと、

「ひなただって、もう子供じゃないもん。お兄ちゃんの悦ぶこと、ちゃんと知ってるんだから」

と言ってから、竿の裏筋を舐めあげた。

「くううううっ！」

尿道海綿体を集中的に刺激されて、座っている少年はあお向けに倒れそうなくらい大きくのけ反った。準備を整えつつあった射精感が、一気に高まってくる。

だが、少女はまるで兄を焦らそうとするかのように裏筋から舌を離すと、肉棒の脇を舐めはじめた。

この刺激でも気持ちよさはあるが、どこかはぐらかされたような焦れつたさも感じる。

しばらく竿を舐めまわしてから、ひなたは再び一物を口内に深々と呑みこんだ。

（僕……夢でも見てるんじゃないかな？ ひなたが、こんなことをするなんて……）

人気アイドルとなった妹と七年ぶりに再会できたことすら、知哉にとっては夢のようない出来事である。それだけでなく、いきなりアパートに押しつけてきたうえに、下着エプロン姿でペニスをおいしそうにしゃぶっているのだ。欲求不満のあまり淫夢を

見ている、と言われたほうが説得力があるような気がする。

全身を駆けめぐる快感の波が、現実感をますます乏しいものにしていく。

しかし、視線を落とせば間違いなく妹の姿がある。それに、肉棒に初めて感じる少女の口内の熱さや舌のぬめり。この気持ちよさが、夢なはずはない。

「ん……んちゅ……んぷ……んん、んん……んぐう……」

吐息とともにこぼれるひなたの声には、プチュプチュという濡れた音も混じっていた。

いつもはマイクを握るスラリとした繊細な指で少年自身の根元をつかみ、人々を魅了する歌声を出す可憐な口が男性のモノをすっぽりと含んでいる。

そんな煽情的な光景を見ていたら、たちまち射精感がこみあげてきた。どうやら、オナニーするより遥かに早く達しそうな気配だ。

(とにかく、これが夢でもなんでも、一度出さなきゃもう収まらないよ)

結局、知哉はそう割りきることにした。

兄が限界寸前なのを知ってか知らずか、ひなたはなおも熱心な愛撫をつづけた。龟头を唇で挟みこみ、先端の全体をネットリと舐めまわす。

敏感な部分を這う舌の動きや感触が、ペニスを通してはつきり伝わってくる。背筋

に痺れるような快感がこみあげてきて、爆発寸前まで溜まっていた情熱がついに最後の一線を越えた。

「くうっ！ ひなた、出る！」

知哉が呻いた瞬間、大量の白濁液が奔流となって少女の口内に注ぎこまれた。

「んぐっ!? んんんんっ!!」

口のなかに、いきなり精液をぶちまけられるとは思わなかったのか、ひなたが目を見くくしてぐもった声をあげた。しかし、それでも口を離すことなく、兄の情熱をしつかりと受けとめる。

知哉は、精とともに魂がズレ落ちるような快感に酔いしれていた。射精という行為はオナニーと同じはずなのに、スペルマの量が比べものにならないくらい多い。

ひなたは、手で竿を軽くしごいて尿道に残った精の残滓^{ざんし}まで搾りだした。そして、精が完全に出つくしたのを確認してから、口内を満たした精液をこぼすまいとするかのように、ゆっくりと口を離した。

目をつむり、苦い青汁でも飲むかのように顔をしかめながら、口内のモノを喉の奥へと流しこむ。

「んぐ……ふはあ。なんか、生温かくて変な味……でも、これがお兄ちゃんの味……」